

原著

日本体育会による国民体育の振興に関する一考察

— 明治後期から大正初期における博覧会での展示活動に着目して —

綿貫 慶徳

A Study on the Promotion of National Physical Education by the Japan Physical Education Association — With Reference to the Display Activities through Expositions from the Late Meiji Era to the Early Taisho Era —

WATANUKI Yoshinori

Abstract

Three exhibitions the Japan Physical Education Association participated, 5th national industrial exhibition 1903, Tokyo industrial exhibition 1907 and Tokyo Taisho exhibition 1914, from the late Meiji era to the early Taisho era when the imperialism has gone ahead in Japan, were the trials in the appearance of entertainment tendency including colonial and show-like display becoming one tide at exhibitions after the Taisho era. On the basis of the above-mentioned trend in the exhibition, the purpose of this study is to clarify the aspect of promotion of national physical education through exhibitions from a point of view that the occasional thought about the promotion of national physical education in the international field of vision of The Japan Physical Education Association was concretized by concentrating power to both sides, “Traditional Japan display” and “Modern Japan display” to focus on display activities of them.

The points clarified in this study are as follows.

The Japan Physical Education Association attempted to promote national physical education concentrating power to “Traditional Japan display” at 5th national industrial exhibition and “Modern Japan display” at Tokyo industrial exhibition. Retardation of the preparation for “Modern Japan display” and one end of entertainment tendency on “Traditional Japan display” arose. Afterward, the fluctuation on the promotion of national physical education was exposed at Tokyo Taisho exhibition because The Japan Physical Education Association has concentrated power to entertained “Traditional Japan display” being the most basic objective by pulling in customers to plan the reconstruction of finance having gotten worse on the occasion of participation in exhibition. The Japan Physical education Association’s display activities, that concentrated power to both “Traditional Japan display” and “Modern Japan display” in turn at each exhibition, added show-like display gradually and fitted into the category of entertainment tendency at exhibition world in the end at Tokyo Taisho exhibition, however, colonial display wasn’t formed through three exhibitions.

1. はじめに

日本体育大学の母体にあたり、明治24年8月に陸軍出身の日高藤吉郎が開設した日本体育会（開設時の名称は体育会、翌年6月に改称）の使命は、国民の体位・体力の向上を目的とする国民体育¹⁾の振興にあった。日清戦争を契機に国民の体位・体力が社会問題化したことにより、日本体育会は国民体育の振興を全国的規模にひろげながら勢力を拡張させていくが、国庫補助金交付が打ち切られて以降、補助金頼りの組織運営を引き金とした経営苦境が深刻化していき、大正3年に経営破綻が表面化する。この間、脱亜入欧を時代思潮とした軍事力による領土拡張政策と切り結んだ日本の帝国主義化の道程、つまり日清・日露勝利を経て、列強の一員となった日本と欧米諸国のアジア支配に向けた動きが活発化していった。この中で、日本体育会は学校と社会の両面に関わる様々な国民体育の振興策を展開したが、本稿でとりあげる各種博覧会での特設会場²⁾の開設は、同会の歴史に刻印された大掛かりな振興策の一つであり、近代日本の体育・スポーツ史で特筆に値する壮大な試みであった。

日本体育会が最初に特設会場を開設した明治36年の第五回内国勸業博覧会では、それまでの産業奨励を意図した展示形式に帝国主義的な差別意識に基づく植民地主義的要素³⁾、観覧者増を期待する余興的要素を帯びた展示形式が加えられたことにより、博覧会の娯楽化現象があらわれ、それが人気を博したために明治40年の東京勸業博覧会、大正3年の東京大正博覧会では、博覧会の娯楽化傾向が引き継がれていった。娯楽化傾向がみられたこれらの博覧会において、後述する先行論文が示すように、日本体育会は運動用器具の製造販売を促進する役割を果たし、産業奨励上の効果を残した。これとは異なる視点から、国民体育の振興の有り様が集約された展示活動それ自体に注目してみると、上記の各種博覧会において、その時々国際的競争場裡の視界に立った国民体育の振興に関する日本体育会の考えが、江戸期以前より継

承されてきた武芸・遊戯とそれらに関わる施設・用器具を包含した「伝統日本」展示、もしくは、西洋近代を発祥由来としたスポーツ運動とそれに関わる施設・用器具を包含した「近代日本」展示⁴⁾、双方への力の入れ方に具象化されていたことが認められる。

列強諸国により帝国主義的な世界秩序が形成されていった明治後期から大正初期にかけて、日本体育会が参画した3度の博覧会での展示活動は、博覧会への参加を重ねるごとに経営状況が悪化していった中での試みであった。これら博覧会の背後にあった日本体育会の動静を踏まえるために、同会が発行した機関誌「體育」⁵⁾を主要史料として用いる本稿では、博覧会の娯楽化傾向が進む中で日本体育会が手掛けた「伝統日本」展示と「近代日本」展示、双方への注力の有り様に着眼しながら、各種博覧会における展示活動のねらい、および、博覧会間の展示内容の異同を浮き彫りにし、博覧会への参画を通した日本体育会による国民体育の振興の様相を明らかにしていく⁶⁾。

2. 先行論文の検討

本稿は明治後期から大正初期にかけて、日本体育会が参画した3度の博覧会における展示活動に検討を加えるものである。これに関連した従前の取り組みは、体育・スポーツ史の領域で蓄積されており、それらは日本の体育・スポーツ通史をまとめる中で日本体育会が参画した博覧会にまで視野をひろげたもの、日本体育会の学校史をまとめる中で博覧会での取り組みを概括したものに大別される。前者では、明治32年の国庫補助金交付を契機に興隆期を迎えた日本体育会の事業を概略する中で、博覧会に関する断片的な記述が残されている⁷⁾。後者に該当するのは、『学校法人日本体育会日本体育大学八十年史』⁸⁾、『学校法人日本体育会百年史』⁹⁾である。双方の学校史に共通した点は、日本体育会の栄華を映し出し、その一方で、経営史的な観点から日本体育会の衰退を招き入れた象徴的な事象として博覧会への参画を捉えたこと、運動用器具の製造販売の促進に貢献した

事象として、産業史の中に博覧会を位置づけたことにある¹⁰⁾。また、『学校法人日本体育会百年史』の編纂にあたった谷釜の博士論文では、上記の学校史を下敷きとして、博覧会での展示活動にふれながら、日本人の身体の国民化過程をまとめている¹¹⁾。多様な史資料からまとめられた後者の文献は、日本体育会の動静や博覧会での取り組みの大意を把握するうえで、本稿に与るところは少ないが、展示活動の詳細に分け入った検討がなされたものではなかった。

また、資料の収集や公開といった展示活動に備わる要素は、博物館運営の重要な営みであることから、博覧会や展覧会と体育・スポーツの関係を歴史的に考察した研究が博物館学の領域で認められる。これに該当する井上の論考は、大正期から昭和戦前期にかけて開催されたスポーツ展覧会の特徴を導き出し、その分類化を試みたもの¹²⁾、「同時代性」という観点から、昭和初期に開催された野球に関する展覧会の展示内容を検討したものである¹³⁾、本稿の検討対象期間にあたる明治期の博覧会にまで論及したものではなかった。

体育・スポーツ史や博物館学以外の領域での万国博覧会や内国勸業博覧会を検討対象とした研究は、1980年代より本格的に始動し、それ以降の動向については、数々の研究者によって整理されている¹⁴⁾。それらにみられる歴史的アプローチの類型軸は、主に科学技術史、経済史、政治史、社会史の各観点に設定されている。これら個別研究領域間の境界線は決して鮮明でないが、日本の帝国主義化を背景として博覧会に参画した日本体育会の展示活動に着目する本稿は、吉見と國が上梓した以下の文献に着想のヒントを得ている。

社会史的観点から、個々の出品物やパビリオンが織りなす世界像の構築とその受容のされ方を検討した吉見は、欧米の万国博覧会と日本における国内博覧会の参照関係を通して、「帝国」のディスプレイ、「商品」のディスプレイ、「見世物」としての博覧会という特徴の現われや相互の重なりあいを導き出した¹⁵⁾。また、政治史的観点を基調としつつ吉見の社会史的観点を取り入れた國は、

5回にわたって開催された内国勸業博覧会に関する政府の運営状況や博覧会間の変容を明らかにし、これと西洋文明の導入という視点を重ね合わせ、明治期に発展した機械工業の有り様、不平等条約のもとで産業を自力で進行せんとした明治国家のすがた、20世紀初頭における政府の博覧会開催の役割の終焉を提示した¹⁶⁾。

博覧会通史に近い巨視的な観点からまとめられた両者の文献は、本稿への着想のヒントに加えて、本稿の検討対象である博覧会の大意を把握するうえでの基礎的な知見を与えるものでもある。しかし、日本体育会の使命である国民体育の振興を参照軸として、同会が博覧会で開設した特設会場での展示活動を通観する試みがなかったこと、つまるところ、管見の限りであるが、複数の博覧会にわたる特定の参加主体の展示活動と同主体が担う使命の関連性を問う個別的な研究が取り込まれてこなかったことを指摘しておきたい。

3. 日本体育会の動静

本項では、日本体育会の誕生期から本稿の検討対象期間の末部にあたる大正3年までの同会の動静を素描しておきたい。陸軍軍人であった日高藤吉郎が東京都牛込区に設立した体育会は、明治24年8月に社会体育の場ともいべき体育場の開設をもって始動した。士官学校の予備教育機関として日高が設置した成城学校の機関誌「有文會誌」に自身が寄せた「体育會設立ノ要旨」は、日本体育会の組織的性格を示した最古の文章にあたる。そこでは、国家富強を念頭に活動を展開せんとした旨が以下のとおり説かれている¹⁷⁾。

夫レ身体健康ナラザレハ、心志剛強ナル能ハズ。心志剛強ナラザレハ、事二堪ヘ業ヲ遂クルコト能ハス。而シテ身体ノ健康ヲ欲セハ、身体ヲ運動スルヨリ善キハ莫シ・・中略・・体育ノ重キハ既ニ此クノ如シ。即チ余カ輩以爲ヒラク、体育ヲ盛ニシテ國民ノ強壯ヲ謀ルハ、蓋シ國家富強を圖ル大本ナリト・・中略・・冀ハクハ同感諸君、之レヲ賛

襄シ來リテ、之レヲ鍛錬セラレ、一ハ以テ自己ノ將來ヲ謀リ、一ハ以テ國家富強ノ本ヲ建成セラレムコトヲ。(傍点原著者)

ここには、体育会の結成を以て国民体育を振興し、富国強兵を担おうとした日高の考えが開陳されている。谷釜によれば、短い軍隊生活の中で日本人の体位・体力が劣っていること、軍人としての指揮能力を欠いていることを痛感した日高の体験が、将来の軍人養成を睨んだ体育会の創設へ走らせたという¹⁸⁾。創設翌年の6月に体育会は日本体育会へと改称し、明治26年3月の体操教員養成の場である体操練習所の設立、同年11月の体育雑誌の嚆矢とされる「文武叢誌」の発行、明治27年7月の遊泳場の設置等、東京市内を中心に多様な活動を展開していった。日清戦争を契機とする日本の帝国主義的な国際競争場裡への登場をもって日本体育会への軍国主義的期待が高まり、同会が更なる発展をみせたことは¹⁹⁾、明治29年7月に設立された大阪支会を最初として、全国各地に支会がひろがっていった点にみてとれる。

日清戦勝に勢いを得て、明治28年9月の狭窄射撃場の設置、明治30年7月からの兵事講習会の開催等、軍事面に多大な関心を向けていった日本体育会は、明治31年1月の閑院宮載仁親王の総裁への推戴、明治32年3月の5年間年額1万円の国庫補助金交付指令書の受領、明治33年12月の鹿児島支会会長であった加納久宣子爵の副会長就任と、会史に燦然と刻まれる興隆期の基盤を形成していった²⁰⁾。それは、日本体育会が閑院宮殿下の推戴をもって社会的信用を高めたこと、国庫補助金交付をもって明治34年9月に私的任意団体から社団法人組織へ改組し、国家的使命を担うにふさわしい体裁を整えたこと、鹿児島県知事として地方行政にその名を轟かせた加納が、自らの私財を投げうち、実業界からの融資に奔走して、一時的な年次会費制度や皇室からの下賜金による脆弱であった経済基盤の資金補強に尽力し、会務運営の改革を進めたことに示される。この中でも、明治34年11月に会長に就任した加納は、「加納会長の

時代こそ、日本体育会の名声を不滅のものとした時代である」²¹⁾と評されるように、明治44年12月に経営の行きづまりから同職を辞任するまで、興隆期の日本体育会を支えた象徴的人物であった。

国庫補助金交付により財政が安定した日本体育会は、明治33年4月に東京市内の中心部である九段下牛が淵に本拠を移転した。それまでの事業は社団法人化後も引き継がれ、国庫補助金交付とともに、明治33年5月に体操練習所が日本体育会体操学校に改組して文部大臣の監督下の各種学校となり、また、体育場を発展させた模範体操場の運営、欧州体育の事情調査、数々の体育書の編纂を手掛けるなど、日本体育会は事業規模を拡大させていった。『日本體育會事業概略』には、明治34年2月以降の「將來擴張スベキ事業ノ概略」の一つとして、体育館が掲げられている。後述するように、東京勸業博覧会、東京大正博覧会で建設される「体育会館」としての体育館が「老若男女一般ニ遊戯運動等ヲ奨励セムガ爲ニ一大會堂ヲ建設シ體育館ト稱シ上ハ講堂ト爲シ演説講演其他各種ノ會議等集會ノ用ニ充テ階下ニハ諸種ノ遊戯器具ヲ備ヘテ室内運動場トシ以テ益體育運動ノ奨励ヲ圖リ併セテ會員ノ一大娛樂場ト爲スコト」²²⁾とする説明のもと、新規事業に盛り込まれていた。

興隆期の豊かな財源が存分に活用されたのは、第五回内国勸業博覧会であった。同博覧会に合わせて、日本体育史、日本体育会の沿革、出品目録の解説を網羅した『日本之體育』を明治36年4月に刊行し、欧米で考案された数多くの運動用器具を取り寄せるなど、日本体育会は多大な労力を注いだ。しかし、第五回内国勸業博覧会における出費の増加は、政府による日露戦後経営の緊縮財政にともなう明治37年度以降の国庫補助金交付の打ち切りと相まって、日本体育会の経営難をもたらす大きな要因となり²³⁾、それは明治37年9月の交通が不便な東京の南郊荏原郡大井村への本拠移転に端的なかたちであらわれた。

国庫補助金交付の打ち切りは、会費、寄付、各種事業収入による自力での財源確保を日本体育会に迫るところとなったが、東京中心部の牛が淵を

離れた大井村では、経営資金の獲得に不都合が生じ、社会体育面での事業の大部分が縮小していった²⁴⁾。しかし、日本体育会は資金繰りに苦しむ中にあっても、博覧会に繰り返し参画する決断を下した。この理由を考える手掛かりとして、谷釜は「補助金経営に基づく活動は、補助金の打ち切りによって大きな打撃を受けることになった。運営のための資金は枯渇しているにもかかわらず、拡大した事業に対する責任は負わねばならなくなったのである」²⁵⁾と、日本体育会の道義的責任にふれている。これに補足を加えるならば、国庫補助金交付の実績、明治34年度から大正3年度にかけての東京府・東京市からの補助金交付により²⁶⁾、日本体育会に国民体育の振興団体としての社会的責務が課せられ、そのために同会の内に社会的関心が高い博覧会に参画せねばならないとする意志が働いたと考えられよう。ともあれ、東京勸業博覧会への参加が引き金となり加納会長の辞任に及び、また明治45年1月に会長に就任した陸軍中将比志島義輝も経営資金を確保する方途が見出せず、東京大正博覧会への参画は無謀なる試みであったとする会史の概説が示唆するように²⁷⁾、両博覧会は日本体育会の経営破綻を招来させる原因となった。大正3年に経営破綻が表面化して以降、日本体育会は同会体操学校、および、同校に併設するかたちで明治38年4月に誕生した荏原中学校の学校経営を主とする団体という性格を色濃くしていった。

4. 日本体育会の各種博覧会における展示活動

日本体育会が参画した各種博覧会での展示活動を検討するにあたり、それらの前後を含めた日本における博覧会の動向を略記しておきたい。

明治6年のウィーン万国博覧会、明治9年のフィラデルフィア万国博覧会に参加した明治政府は、富国強兵を国是とした殖産興業にたいする博覧会の有用性を実感し、万国博覧会を国内規模に縮小した内国勸業博覧会を編み出した²⁸⁾。明治10年の東京を皮切りに、その後東京で2回（明治14

年、23年）、京都（明治28年）と大阪（明治36年）で1回ずつ開催された内国勸業博覧会の主眼は、国内在来技術の改良・普及、欧米技術の導入・模倣にあったが、回を経るに従い、産業奨励効果とともに博覧会の開催によるインフラ整備が期待され、第五回内国勸業博覧会を端緒として地域への経済効果を念頭に置いた博覧会の娯楽化が鮮明になっていった²⁹⁾。明治政府が明治45年の開催を計画し、財政難を理由に明治50年に延期措置をとった後も財政状況が好転せず、結果的に中止となった日露戦勝記念としての日本大博覧会の検討を進めていた間、東京府は独自の博覧会の計画を進め、日本大博覧会と同様に財政難から頓挫する第六回内国勸業博覧会の開催予定年であった明治40年に東京勸業博覧会を開催した。これに続けて、大正新時代の盛運を期すべく、産業奨励と大正天皇即位の大典を記念するため、東京府が大正3年に開催したのが東京大正博覧会であった。これら東京府による博覧会の開催は、東京府が内国勸業博覧会レベルの博覧会を実現させられるだけの行政力を有し、その一方で国家が多額の財政支出を覚悟してまで博覧会を運営する必要性が薄れていたことをあらわしていた。大正期以降、地方自治体の成長とともに地方博覧会が盛んとなるにつれ、内国勸業博覧会の機能は分化し、産業別の博覧会や展覧会が一般化していく。

4-1. 第五回内国勸業博覧会

明治36年3月1日から7月31日にかけて、大阪市の天王寺公園一帯で開催された第五回内国勸業博覧会（以下、第五回内国博と略称）は、前回の京都博覧会の会場面積、出品点数を大幅に上回るとともに、ライオンやバクを呼び物とした動物園や無線電信、活動大写真等を実施した不思議館、老若男女が歓喜したメリーゴーランドをはじめとする30種の余興が功を奏し、当時の国民人口の約1割弱に相当する530万人余の観覧人員を記録した催しであった。また、日清戦勝を契機に鮮明となった日本の帝国主義化のもと、「征清大捷に依り帝國の英名を宇内に轟かしつつ以來始めてある

の博覧會」³⁰⁾との雑誌記事が示すように、日露戦争が射程に入ってくる頃に実現をみた第五回内国博覧會では、政府の主導により欧米諸国からの出品物を陳列した参考館のみならず、日本の統治下にあった台湾の専門館、琉球、朝鮮、清等、各地の現地人に自らの風俗や生活の様相を紹介させることに趣向を置いた人類館が設置され、植民地主義的要素を帯びた展示形式がとりいれられた。

博覧會事務局、大阪市より無料借用をうけた第一会場内の1600坪の敷地における日本体育会の特設体育場の設置は、同会とともに第五回内国博覧會の総裁でもあった閑院宮の発案であった。以下の引用が示すように、明治35年3月18日付の加納会長にたいする閑院宮の御沙汰のもと、日本体育会と大阪支会との協議により特設体育場が具体化された³¹⁾。

明治三十六年第五回内國勸業博覧會開設の時を機とし各支會に於て體育諸般の設備を完うして汎く中外人士の參考に資し體育の必要を感ぜしむるは國家の爲め且斯業擴張の爲め寔に緊要なるを以て自今尙一層勉勵斯業をして體育會の名に耻さらんことを勉むへく又大阪支會にあつては殊に博覧會と直接の關係を有する故宜しく本會と協同賛劃し之れが計議を遂げ圓滿の效果を収むへき旨殿下より御沙汰有之候條此段及御通達候也。

「第五回内國勸業博覧會日本體育會臨時體育部規則」の第一条には、「體育に關する各種の設備を整へ廣く公衆の運動用に供し以て體育の必要を一般に感受せしむるを以て目的とす」³²⁾とある。これに従うように、日本体育会は実演・実地指導を含め、入場料を課さずに特設体育場で体育の奨励を図っていった。寺田勇吉、篠田利英、高島平三郎、川瀬元九郎等の日本体育会関係者や嘉納治五郎、小野泉太郎、佐藤福雄等の武道・遊戯・外来スポーツの推進者をはじめ、計15名の特設体育場経営調査委員が敷地内の体操場の設計、参考館陳列室に設置する展示物の選定にあたり、この計

画の実現に向けて、大阪府知事を委員長に大阪支会役員と寺田、篠田、高島の3理事を委員とする臨時體育部が設けられた³³⁾。

「運動器械ノ部」「古來武芸に用いたる器具ノ部」「古來遊戯に屬する器具」「體育に關する諸統計表類」「體育に關する内外の出版物及び写真等」「體育に關する諸統計」の各群からなる参考館陳列室の展示物の詳細は、『日本之體育』でまとめられている。「運動器械ノ部」を構成した新しい運動用器具の大部分は、大手運動具メーカーであった美満津商店の協力により準備されたエキセルサイザー、ローイングメシ、クリケット、クロッカー等、欧米で考案されたものであり³⁴⁾、それらを展示するのみならず、使用するかたちで運動を入場者に披露・指導した。しかし、これら以上に衆目を集めたのが、「最人目を惹けるは多く参考館に陳列すべき武具遊戯器類にして殊に我國古來體育の有様、之が奨励方法等を究め且武術歴史上の參考とも爲るべきもの甚甚からずと云う」³⁵⁾との新聞記事が示すように、「古來武芸に用いたる器具ノ部」「古來遊戯に屬する器具」に該当する日本体育会や篤志家が所蔵していた古來武芸・遊戯に關する器具であった。これらの展示については、『日本之體育』上編の「日本體育ノ變遷」冒頭にある「我が國民が古代ニ於テ如何ナル體格ヲ有シタルカ・・中略・・然レドモ之ヲ記録ニ徴シ、之ヲ殘留セル器械器具ニ徴シテ察スルニ、我が國民ハ古代ニ於テ特ニ武ヲ尙ビ強健偉大ノ體格ヲ有セシモノノ少カラザリシハ事實ナルガ如シ」³⁶⁾との文言、「各種の武具及び遊具の古人の順、内外の別によりて多數陳列せるが我邦のものが世を経るに従いて形小さく量軽くなれるは慨すべく」³⁷⁾との新聞記事が確認できる。これらの史料から、特設体育場の衆目を集めた古來武芸・遊戯に關する器具の展示活動は、先人が使用した器具の大きさを誇示することで、体位・体力の低調ぶりを警告せんとするねらいがあったと捉えられる³⁸⁾。

また、冒頭部以降、神代を起点とした兵法や遊戯と先人の体位・体力との関りを論旨とする「日

本體育ノ變遷」末部に残された、「吾人今日ノ體軀ハ之ヲ先人ニ比スルモ劣レルヲ知ルベク、之ヲ現在ノ歐米人若シクハ支那人ニ比スルモ更ニ劣レルヲ知ルベシ」³⁹⁾との文言が語るように、国民の体位・体力の良否を判断する基準は、欧米人のみならず日本と戦火を交え、苦渋を味わった中国人にも置かれ、彼らを優位とする体位・体力観が示された。これに続けて『日本之體育』上編では、「日本體育會ノ事業」をまとめた後、「邦人古今體力ノ變遷ヲ徴ス可キ諸器具」、「古今遊戯用諸器具」をとりあげ、兵事での使用法、身体の鍛錬上の効果、器具の重量、厚さ、長さ等、古来武芸・遊戯に関する器具について、先人の偉大な体位・体力を推想せしめる説明が重ねられている⁴⁰⁾。古来武芸・遊戯に関する器具の展示活動には、実際のところ日本体育会の要人が強い関心を向けていた。それは、同会が博覧会期間中に開催した体育講演会における、「日本帝國の體育に關しては、古人が今人に優つるか、抑も亦た今人は古人に勝れて居るかとの解釋は當博覽會開場以來特設體育場に設置したる、參考館に陳列なしある所の、古今の武器及び古今の遊戯器具等の沿革に依つて略々我國民の今日の狀態が、如何に消沈しつつあるかということ御了解下されたることと思ひます」⁴¹⁾との加納久宣の演説内容、および、次に引用する理事職にあった寺田勇吉の演題「邦人の體格」の一部に示されている⁴²⁾。

昔の人を今日に比べて見ますると今日の人間より健全であつたことは種々の點においてこれを證明することが出來ようと思うのです、即ち壽命の如きまた寸尺の如き體量の如き總て大に短縮し、今人の氣力といふものが決して古人に及ばぬ、今人の體格は決して古人に及ばぬ・・中略・・元龜、天正時代の我國民は如何なる國民であつたかと申しまするに、體量の點に於ても亦氣力の點に於ても餘程當時は盛であつたに相違ない、當時吾々の先代は一大帝國であつたということは歴史上明である。

以上から、寺田が加納と同様に日本の帝國主義化という社会の趨勢の中で国民の体位・体力を捉え、その範を戦国動乱、朝鮮半島を戦場とした文祿の役が刻まれた織豊時代の先人に求めていたことが認められる。これら要人の演説内容から、日本体育会が先人の偉大な体位・体力とともにあった古来武芸・遊戯に関する器具の展示活動に力を注いだ理由の一端を垣間見ることができよう。

参考館陳列室の他に目を転じてみると、日本体育会は後述する2つの博覧会以上に在来スポーツ、外来スポーツを幅広くとりあげて多様な展示活動を展開した。それは、「体操場に設置した回轉鏡、米國式梁木、シーソー、身長計、体量計等の器械体操用器、計量諸器械類の入場者への開放」「体操場や大阪支会施設を含め、府内各所におけるローンテニス、自転車、端艇競漕、武術、蹴鞠等のイベントの開催」「皇室関係者の巡視時や日本体育会定期総会時に実施された体操学校教員生徒、大阪支会生徒会員、大阪府内女学校生徒による体操、ローンテニス、ローラースケート、古来遊戯等の実演」「会場周辺地域の学校施設における普通体操、兵式体操、遊戯の三科短期講習の開催」にまとめられる。これら大部分の詳細は、第五回内国博や日本体育会の関連資料を見渡しても確認できないが、機関誌「體育」や新聞において、武術と蹴鞠の取り扱いが大きく、細かな報道がなされていたことは注目すべき点である。

擊劍、柔術、薙刀の総合大会として、5月9日に体操場内にしつらえた仮屋で開催された「日本體育會武術大會」については、機関誌「體育」で擊劍、柔術の出場者、試合の決まり手、薙刀の仕太刀が詳報され⁴³⁾、日本体育会関連の新聞報道としては異例の一段以上の記事スペースが割かれた⁴⁴⁾。また、蹴鞠については、機関誌「體育」で「本會は京都蹴鞠保存會に交渉を重ね體育場内に一區の地域を整え蹴鞠會を執行す衣冠渾て古式に従い且左に掲ぐる全技の由來書五千枚を印刷して入場者に配布し貴顯紳士夥多なる觀覽の中に數回の演技を行えり」⁴⁵⁾とする前書きの後、蹴鞠由来書の全文が掲載され、この他、識者による歴史と

方法からなる蹴鞠の大略を掲載した新聞記事も認められた⁴⁶⁾。これらの報道が実演展示として捉えられる上記の取り組みにたいする日本体育会の熱量を映し出したかは定かでないが、体位・体力の低調ぶりを警告するねらいから、同会の「伝統日本」展示にあたる古来武芸・遊戯に関する器具に注力したさまが、在来スポーツの実演展示にも及んでいたと推しはかることはできよう。

以上より、第五回内国博における日本体育会の展示活動は、余興的要素や植民地主義的要素を備えた娯楽化現象が同博覧会にあらわれた中において、これに比重を置くことなく、「伝統日本」展示をもって国民の体位・体力の啓発に注力し、国民体育の振興を図らんとするものであった⁴⁷⁾。

4-2. 東京勸業博覧会

明治40年3月20日から7月31日にかけて、東京市の上野公園一帯で開催された東京勸業博覧会（以下、東京勸業博と略称）は、会場面積、出品点数で第五回内国博に大きく劣ったが、530万人余の観覧者を集めた同博覧会より開会日数が19日短かったにもかかわらず、657万人余の観覧人員を記録したように、内国博と同レベルの注目を集めた催しであった。国家からの補助をうけず、東京府独自の運営であった東京勸業博は、先述した日本大博覧会への試金石、会場周辺のインフラ整備、明治23年の第三回内国勸業博覧会以来の東京における博覧会招致といった社会的要請や期待を受けていた。また、「戦後國運の膨張に伴ふ大發展は、各種の方面に現實せられぬ。世界列國に伍しては、其國威の益光輝あるを覺ゆると共に、殖産業の上に於ても、力を先進國と競ふて、敢て遜色なからんとするの域に進み⁴⁸⁾」とある博覧会案内書の文言が示唆するように、東京勸業博の目的は、日露戦勝により軍事面で欧米列強と肩を並べたことを受けて、帝都の産業發展を喚起し、殖産貿易に資益せんとするににあった。

日本の津々浦々から出品物を集め、18カ国であった第五回内国博の海外出展が24カ国に増加するなど、国内外と帝都の産業發展の広域的な比較

を試みた東京勸業博は、地域博覧会の域にとどまらない性格を帯びていた。第五回内国博でみられた余興的要素は、観覧車を代表的な呼び物とした東京勸業博でもみられたが、植民地主義的要素については、台湾、朝鮮の各パビリオンが設置されたままであった。この要因としては、第五回内国博で設置された台湾館、人類館にたいし、現地からの非難や展示差し止めの請求があり、展示の一部が中止に至ったことがあげられる⁴⁹⁾。

第五回内国博期間中の明治36年6月、文部省の各種団体にたいする国庫補助金交付の全面中止が決定すると、経営状況が逼迫していった日本体育会は、機関誌「體育」で国民体育の振興に向けた口調を強めながら、経済支援を求める論説を度々掲載し、補助金に代わる新たな財源確保の方途を模索していった。結果として日本体育会が導き出したのは、新たな事業方針を打ち出し、新規事業にたいして募金を求め、これを同会経営の運転資金にあてるやり方であり⁵⁰⁾、その最たる例が日露戦争後に浮上した戦捷記念体育館の建設であった。戦捷記念体育館が先述した明治34年2月以降の将来拡張すべき事業と関係していたかは定かでないが、同体育館の趣旨と計画の要領について、機関誌「體育」に掲載された以下の前付を引用しておきたい⁵¹⁾。

國威を世界に發揚したるの偉績は之を千歳に傳えて子孫に此の榮榮を頌たざる可らず是れ現代國民の義務にして又此戰役に依て益體育の必要を吾人に教訓せられたり本會此に考うる所あり戦捷紀念として帝都に一大體育館を設立して天下後世に遺さんとす蓋し此の種の紀念として後世に傳えんとするには第一教育的なること第二尙武的なること第三實益的なることを以て最必要の條件とす而して幾多の計畫中此條件を具備せるもの體育館を措て他に之を求むべからず・・中略・・茲に本會の企圖を表白して廣く有志の贊襄を求む。

日本体育会は戦捷記念体育館の建設に多額の寄

付を期待し、経営状況の改善を図ろうとしたが、体育館の建設は実現しなかった。しかし、日本体育会が高らかに謳いあげた計画であったため、何が何でも建設を実現せねばならないとする意識が一人歩きし⁵²⁾、東京勸業博における「体育会館」としての体育館の建設に計画が転用されたと言われている⁵³⁾。実際のところ日本体育会は、戦捷記念体育館の建設が経営を立て直す一つの方途であったとしても、そのみでは捉えられない意味を体育館に見出していた。それは、戦捷記念体育館の建設計画の発表後に発行された機関誌「體育」の論説「富國強兵の基」から読み取れる。この論説では、ドイツ体操の創始者であるヤーンの名を冠した体育館が世界第一と称されるものであると言及したうえで、「今や我帝國は一等國の仲間に加わりながら、尙何時までも歐米諸國の下風に立つて居らるべきか、是れ本會が來業の擴張に付熱誠を吐露し世に警告する以所なり」⁵⁴⁾と、欧米列強との比較に基づいた事業拡張の必要性が訴えられた。ここから、日本体育会の体育館への関心は、体位・体力の向上を支える環境整備の面で、欧米列強に向けた対抗心とともにあったと推すことができるが、それは同会の東京勸業博への参加が明るみにされた以下の彙報からもうかがえよう⁵⁵⁾。

日本體育會にては明年三月廿日より上野公園に開設す可き東京府勸業博覽會に體育館を設けんことを府縣に交渉中此程交渉纏り愈々圖書館前なる千五百坪の空地に五萬圓の豫算にて間口十八間奥行二十三間の同館を建設することとなりしが今回のは曩に大阪博覽會に設立せしものより更らに一歩を進め戦勝後歐米人の來遊も定めて多からんことを豫想し其等の笑草とならざる様體育の發達したる米國より出來得る限り諸器械を購入して陳列し(後略)。

上記引用では、体育館の建設を大々的に謳いつつ、その一方で「笑草」との文言がある。「笑草」

という文言の背景には、日露戦勝により日本が軍事面で世界の一等国の仲間入りを果たしたとはいえ、西洋近代を発祥由来としたスポーツ運動に関わる物質文化については、一等国に相応しいとは言いがたい日本の実状があったと推し量ることができる⁵⁶⁾。この彙報以降、東京勸業博における日本体育会の関連資料を見渡しても、植民地主義と結びついた言説や第五回内国博で日本体育会が国民の体位・体力の観点から照準した中国への言及が認められず、また、同博覧会で日本体育会が力を注いだ近隣アジア諸国との戦史を後景とする古来武芸・遊戯に関する器具の展示活動が東京勸業博では実施されなかった。これらの事象を勘案すると、東京勸業博期において日本体育会は、国民体育の振興に基づいた関心を欧米列強に向けており、欧米人の嘲笑を買わないよう可能な限りの「近代日本」展示を施し、列強の一角としての面目を保たんとする考えを抱いていたと捉えられよう。

このような考えのもと、東京勸業博で日本体育会が国民体育の振興を図っていった有り様は、「體育當局者は我が國が歐米各國に比し、體育の奮わざるを遺憾とし、此の機を利用して社會に體育思想を鼓吹し、如何に體育が個人是が振興を圖らん爲め、博覽會第三會場を以て我が體育館に充てられ開設さるに至る」⁵⁷⁾とする同会の場内説明員が残した文言に代弁される場所である。日本体育会が東京勸業博に参加するに至った直接的な経緯は判然としないが、同会は約1360坪の第三会場敷地内に、128坪の室内体操場と96坪の室内温水遊泳場を完備した約280坪の平屋木造による洋式二階建の体育館、および、大弓場と屋外体操場を設置した。5万円という多額を要した体育館の建設経費については、一般からの若干の寄付金と東京府、東京市から各5千円の補助金を集めるにとどまり、不足分の経費に関わる借入金の償却と金利払いが日本体育会の経営を圧迫することとなった⁵⁸⁾。

ともあれ、日本体育・スポーツ史の特記事項として位置づけられ、また、東京勸業博の名誉銀牌

を受賞した体育館について、「遊泳場は体育館の呼び物」⁵⁹⁾と評されたように、7 m×15 m四方、深さ1 m50 cmの室内温水遊泳場は、一際衆目を集めた。遊泳入場料15 銭を徴収し、計9428 人が来場した室内温水遊泳場については、「備え付けらるべき各種の運動器具は目下三井の手を経て米國に注文中なるが何れも未だ本邦に於て備え付けしことなきもののみ」⁶⁰⁾、「此處の室内水水槽は、歐米諸國の構造に基き、寒暑を擇ばず、風雨に拘はらず、一年三百六十餘日極めて安全なる場所に於て游泳の技を習得し以て河海に親むの捷徑を取らんが爲めに、多少人工的に天然を利用した」⁶¹⁾と施設の一端が説明されている。米国製の輸入品である温水用機械に加えて更衣室の温水シャワーも備えた室内温水遊泳場は、まさしく東京勸業博における日本体育会の代表的な展示物であった。

室内温水遊泳場の他に注目してみると、「運動の種類を室内と室外の二種に別てり室内の部分は四十六種何れも本邦未設のものにして方法の新たな興味深く體育助成上最も缺くべからざるものなり室外には鐵棒、吊棒、吊繩、ブランコ、吊環、繩梯子等を程好く配置すれば在來のものとは左して變なし」⁶²⁾との記載が機関誌「體育」にある。10 銭の入場料を徴収し、計1 万7933 人の利用者を集めた室内体操場には、身体各部に応じた器械や第五回内國博で好評を得た槽艇器械など、46 種の運動用器具が設置され、それらの大部分は米国最新式であった。また、運動用器具の大半は天井へ巻き上げる仕組みとなっていて、空いた大広間では柔道、擊劍が実施された。その一方で、屋外運動場に設置された運動用器具は、日本体育会が所有していたもので、目新しさは無かったが、運動場の一部をコンクリート舗装してローラスケート場や庭球場にあて、ホッケー用器具を用意し、さらには大弓場を設置して弓術大会を催すなど、第五回内國博における多様な取り組みには及ばないものの、在來スポーツと外来スポーツの双方に関連した実演展示が展開された。

実演展示にまつわる取り組みについて、第五回内國博との関連で注目すべき点は、日本体育会が

再び蹴鞠の公開演技を計画し、中止となったことである。『学校法人日本体育会日本体育大学八十年史』には、「会期中は、しばしば劍術大会や弓術大会などの行事を行なったり、成績優秀者に賞状を与えたりして全般に好評であったが、経費捻出のためとはいえ、使用料を徴収した点などには若干の批判が加えられた。そのなかで新聞種となったものに、蹴鞠観覧料の問題がある」⁶³⁾と記されている。事の顛末は、日本体育会が京都在住の華族間で設立された京都蹴鞠保存会に公開演技を依頼したものの、同会に観覧券の売出しが伝わり、蹴鞠が興行として扱われ、名誉を傷つけられたとして、公開演技の拒絶を招いたということであった⁶⁴⁾。ここに、15 銭の入場料を徴収し、皆中者に賞牌を贈呈した大弓場の運営と合わせて、経営困窮下にあった日本体育会の実状がみられるとともに、次項でとりあげる東京大正博覧会における「伝統日本」展示の娯楽化の予兆とも捉えられる事象を見出すことができる。

蹴鞠観覧料の一件に限らず、実際のところ、日本体育会は数々の問題を東京勸業博で引き起こしていた。これについて、先行研究ではふれていないが、博覧会期間の新聞記事を渉獵してみると、博覧会開場日が3 月20 日であったにも関わらず、給水管の故障により室内温水遊泳場が4 月14 日から開場⁶⁵⁾、米国より取り寄せた新式運動具が4 月16 日より出陳⁶⁶⁾という有り様であった。これらの不祥事をもって、日本体育会の特設会場が「笑草」となったかはともかく、列強の一角であることを是が非でも展示活動に反映させんとした同会の試みは、「近代日本」展示に精力を傾けたものであった。しかしながら、体育・スポーツ史研究の知見が示すように、日本における運動用器具の製造技術の進歩は、大正期の試行錯誤を経て昭和期を待たねばならず⁶⁷⁾、明治期の日本には西洋近代を發祥由来としたスポーツ運動に関わる物質文化を細かに扱える技術がなかった。ともあれ、米国製の輸入品から構成された室内温水遊泳場を呼び物とし、展示物の大部分を米国最新式の運動用器具とした東京勸業博における日本体育会の展示

活動は、余興的要素を「伝統日本」展示に孕みつつ、新規性に富んだ「近代日本」展示に注力したもので、計97万7026人の来場者を集めたが、国民体育の振興に関わる環境整備の面で同会が対抗心を向けた欧米列強に「近代日本」展示の基準があった以上、欧米列強の追走に甘んじざるをえなかった実態を露わにするものであった⁶⁸⁾。

4-3. 東京大正博覧会

大正の御代を奉祝するとともに、殖産興業の進歩を促し、国運の拡張に貢献することを目的に掲げ、大正3年3月20日から7月31日にかけて、上野公園一帯、および、青山練兵場、芝浦飛行場で開催された東京府主催の東京大正博覧会（以下、東京大正博と略称）は、会場面積、出品点数で第五回内国博に劣ったが、東京勧業博のそれらを倍近く上回り、約750万の観覧人員を記録した催しであった。東京大正博は第五回内国博、東京勧業博と同様に余興的要素、植民地主義的要素を加味し、上野山内の第一会場と不忍池畔の第二会場を結ぶエスカレーター、南洋諸島の歌舞音楽の実演を呼び物とした南洋館等が人気を集め、また、植民地建築の意匠で設計された拓殖館や台湾、朝鮮、樺太、満州の各パビリオンが設置された⁶⁹⁾。これら博覧会間の比較から、東京大正博で顕著にみられた特色は、英文表記の観覧規定が設けられ、また、博覧会を補佐する役割を果たした協賛会が、明治45年創立の「ジャパンツーリストビューロー」（現在の株式会社JTB）、日支交通会と契約し、両団体が会場内の案内所で英文の博覧会地図や旅行ガイドを配布し、会場内各所に通訳を配置したように、外国人観覧者への積極的な便宜が図られた点にある⁷⁰⁾。

この要因としては、東京勧業博を上回る29カ国からの海外出展が示すように、欧米列強や近隣アジア地域との貿易による商圈拡張の更なる期待、明治末期よりみられた海外観光団の来日といった現象があげられる。実際のところ、後者の海外観光団については、東京大正博に特設体育館を設置した日本体育会も留意したところで、それは機関

誌「體育」に掲載された、日本体育会長の比志島義輝による以下の「東京大正博覧会体育館上棟式に於ける式辭」から確認できる⁷¹⁾。

本會が體育館を開設したる目的は、一般公衆をして體育思想を喚起せしむると共に、實際の運動を試みしめんが爲めに外ならず・・中略・・擊劍、柔道、弓術の如き特に練習を經し者にあらざればなし得ざる運動は、主として海外觀光團に對し我國特有の體育を紹介し併せて國民の元氣を鼓舞せんが爲めなり。

ここには、外国人観覧者への積極的な便宜を図った東京大正博の全体的傾向と同様に、実際に運動を試みて體育を奨励し、海外観光団に日本の在来スポーツを紹介するとの東京大正博における日本体育会の目的が謳われている。比志島の式辭にはないが、東京勧業博以後の機関誌「體育」の論説を眺め返すと、東京勧業博に続き、東京大正博で体育館が建設されたように、日本体育会の大きな関心事項の一つは、「体育会館」としての体育館を社会へ喧伝することにあった。体育館の周知を試みた記事は明治末期に集中したが、その端緒となった、寺田勇吉の「日本體育會の主張」には、「市中に一大體育館を建設して各自最愛の子女をして嬉々として文明的の運動遊戲を爲さしめたいが、何れ先立ものは經費である、尙來四十五年の大博覧會には、今回の東京博覧會に建設したるものより一層宏大なる體育館を建てなければならぬ」⁷²⁾との一節がある。

先述したように、財政難をもって実現をみなかった日本大博覧会における体育館の建設が寺田に意見されて以降、東京の体育振興に関する記事とともに、列強の一角を担う日本の帝都東京が近代都市として発展するためには、欧米列強の主要都市、国内地方部よりも劣等な東京府民や市民の体位・体力の向上を図る必要があり、近代都市を支える人びとの健康問題を改善する方途として、また、近代都市の威容を誇る象徴として体育館を建設せねばならないとする旨の記事が度々発表さ

れていった⁷³⁾。ただしそれらの記事は、日本体育会の経営苦境を打開するための新規事業にたいする募金のアピールという一面も備えており、「文部省よりの補助金絶えたる爲め非常の苦境に陥り昨日の會議にて解散するか但（ママ）しは經營方針を變ずるかの危機に瀕せりと傳う」⁷⁴⁾との新聞論説が認められるように、明治末期の同会の経営状況は、悪化の一途を辿っていた。このような状況下で迎えた東京大正博において、日本体育会が開設した特設体育館の概要を以下に示すように、同会はルネッサンス式の設計による「体育会館」としての体育館を建設するが、室内温水遊泳場や米国最新式の運動用器具を備え、洋式二階建の構造であった東京勸業博のそれと比べ、あまりにも見劣りするものであった。

特設体育館の概要は、大正12年発行の『日本体育要覽』に記載されているが、その所在を確認できなかったため、同書の引用が加えられている『学校法人日本体育会・日本体育大学八十年史』に依り、以下に転記しておきたい⁷⁵⁾。

一、大正三年三月大正博覽会開設ニ際シ体育館ヲ建設ス其要項左ノ如シ

体育館ハ総坪数三百八十五坪余ニシテ演舞場十三間二十間一棟スケート兼体育的の地方特有演技場十八間二十間一棟外ニ貴賓席、体育参考品陳列所、弓術場、事務所等ヲ有シ本館ハ画シテ屋内運動場、屋外運動場、体育参考館ノ三区トセリ

一、屋内運動場ニ於テハ

模範的の体育遊戯、柔道、擊劍、弓術其他我国各地方ニ於テ古來行ハレ来リタル尚武的の体育的の方面ニ關連セル高尚優雅ナル娛樂的の演技仮令ハ參州棒ノ手、鹿児島棒踊、同太鼓踊、熊本白太鼓（出陣ノ舞）同棒試合、琉球ノ唐手、三重ノかんのこ舞、金沢ノ獅子ト棒試合、秋田ノささら、南部七駒ノ舞、其他劍舞、自転車曲乗等ノ如ク古代並ニ現代ニ於ケル体育的の武技及遊技ヲ輪（ママ）次登場シ体育ノ

奨励ト参考ニ供セリ

一、屋外運動場ニハ左ノ運動器械ヲ設置シ以テ一般入場者ノ随意使用ニ供ス
遊動円木、回轉鏡、水平楷梯、鉄棒、固定円木、梁木外五十四種ノ最モ興味アル斬新意匠ノ器械ヲ場内ノ許ス限り設置シ各人ノ随意使用ニ供スルノミナラス熟練ノ教師ヲ付シ其使用法ヲ指導シ体育ノ効果ヲ説明セシム

一、体育参考館ニ陳列セルモノ左ノ如シ

一、我国古今武技遊技ノ沿革ヲ証スベキ器具器械

二、体育ニ關スル統計表

1 一般国民体育狀況 2 学校生徒ノ体育狀況 3 軍隊ノ体育狀況

三、室内運動ニ關スル諸器械

四、体育ニ關スル著書並ニ定時刊行物及写真等ノ類

五、医療体育ノ図並ニ器具器械

六、人体發育ノ狀態

七、学校運動場ニ關スル設備模型

以上の展示内容を第五回内国博、東京勸業博のそれと照合してみると、屋外運動場の運動用器具は両博覽会、体育参考館は第五回内国博の参考館陳列室とおおよその一致がみられるが、体育館にあたる屋内運動場での実施が示された娛樂的の演技については東京勸業博で実施されず、また、第五回内国博よりも際立ったかたちで、皇室関係者の臨場等の大々的なイベント時のみならず、博覽会期間を通して頻繁に実施の機会が設けられた。娛樂的の演技の大部分は、日本の伝統芸能であったが、「一体舞踊ほど露骨に其土地の人情を語り、風俗を表わすものはない。體育館を或る意味に於て日本國民の風尚を紹介する唯一の機關であつて、また大正博覽會の一偉觀であるといつてもよい」⁷⁶⁾とする機関誌「體育」に掲載された回顧談が物語るように、伝統芸能は特設体育館における展示活動の呼び物の一つであり、在来スポーツ、古来武芸・遊戯に関する器具も含め、東京大正博

では国内外の観覧者にたいして「伝統日本」展示に重きを置いた取り組みが施された。

この点に関して、博覧会の運営幹部の協力を得て発行された『東京大正博覧会要覧』では、「珍奇で一般観覧者を悦ばせるものは體育に關する諸國の舞踊である。之は全國の府縣に照會して其地々々の勇壯なる踊を茲に演せしめる」⁷⁷⁾とする特設體育館の解説がなされている。特設體育館の建設経費は、東京勸業博よりも少額の3万円であったが、日本の津々浦々から参集した余興出演者の交通費、滞在費、日給を日本体育会が負担したことは⁷⁸⁾、同会が「伝統日本」展示に注力した一つの証左として捉えられよう。また、同書には「屋外運動場中の呼物と成つて居るのは時々の素人角力、自轉車曲乗、特に小澤氏創始の武術遊戲である、之は從來の劍舞の進歩したもので劍を遣ふ外に、薙刀をも遣う、地も詩吟のみでなく、勇壯な和歌、橋辨慶の如き謡曲類いろいろある」⁷⁹⁾とする日本体育会体操学校で武術体操を教授した小澤卯之助の設計による屋外運動場の解説も加えられている。ここから、第五回内国博、東京勸業博とおおよその展示内容の一致がみられた屋外運動場においても、「伝統日本」展示に注力した展示活動が企てられたことが認められる。

東京勸業博とは異なり、日本体育会が東京大正博で「伝統日本」展示に重きを置くに至った明確な理由は定かでないが、機関誌「體育」に掲載された「日本體育會事業擴張趣旨書」には、将来の博覧会事業において、日本の伝統に依ったかたちで国民体育の振興を図らんとした日本体育会の計画が以下のように表明されている⁸⁰⁾。

來る明治五十年大博覧会の開設あるに會す。本會は此の時機を逸せず、斯界の振興を計ると共に、體育館を該會場内に特設して、古來體育の沿革を現實的に網羅蒐集し、以て我國が東洋の體育國として國運の發展今日に至れる所以のもの、決して偶然にあらざるの事實を立證せば、則ち博覧會觀覽のために渡來する歐米各國の人士が我國勢上の視察を遂

ぐる最良の捷徑にして、又本會當然の義務たるを疑わざるなり。

事業擴張趣旨書では、先にあげた比志島の式辞と符合するかのようになり、伝統をモチーフとした展示活動を試み、それを欧米人に向けて実施する旨が謳われているが、特に注目すべき点は、列強の一員であることを強調することなく、東洋の體育國であることを掲げ、その基盤が伝統にあると唱えていたことであろう。なぜならば、東京勸業博で欧米列強を追走するに過ぎなかった「近代日本」展示の脆さが露わにされ、その後にまとめられた事業擴張趣旨書をもって、欧米列強に照準していた国民体育の振興のゆらぎを見出せるからである。ただし、このゆらぎは、東京勸業博より見劣りすれども、「體育會館」としての體育館を建設した事実が示すように、列強の一角であるという意識が遠のき、「近代日本」展示から距離を置いたものではなく、また、特設體育館で「支那人体力術」と銘打った実演展示が行われ、観衆の大喝采を得たとする日本体育会の取り組みが物語るように⁸¹⁾、東洋の體育國を掲げたとしても、植民地主義的な観点から第五回内国博でみられた中国人を優位とする体位・体力観を転換させたものでもなかった。

東京大正博の展示活動には、第五回内国博のそれとの類似性が認められるが、経営困窮下での日本体育会の無謀に等しかった東京大正博への参加は、財政再建への淡い期待感があったことは否めず⁸²⁾、集客を一義的に等しい目的に据え、伝統芸能を主とする娯楽的演技を前面に押し出したことにより、国民体育の振興に関わる考えそれ自体が第五回内国博と異なって曖昧化し、ゆらいでいったと捉えられる。事実として、東京大正博で自力による財源確保を迫られていた日本体育会は、東京勸業博よりも建設経費が少ない中で、「體育會館」としての體育館を建設したが、それが東京勸業博の體育館よりも見劣りするものであったように、第五回内国博や東京勸業博で実現させたレベルの「近代日本」展示を行う余力を持たなかつ

た⁸³⁾。そこで日本体育会は、東京勸業博よりも大幅に上昇した外国人観覧客の好奇心を誘うために、日本の伝統の中に外国人の関心を引くものがあれば、それを誇示せんとする日本趣味に迎合し、また、日本人にとって馴染み深い伝統を強調する術を選択し、「伝統日本」展示をもって集客に結びつけることにねらいを定めたと考えられよう。結果として、大人10銭、子ども5銭の入場料を徴収した特設体育館の入場者は概して少なく、一日最高3000人、通常700人から800人の集客にとどまり⁸⁴⁾、これが引き金となって日本体育会の経営破綻が決定づけられるに至った。

東京大正博における日本体育会の展示活動は、東京勸業博より小規模の「近代日本」展示に着手しつつ、前2回の博覧会と同様に植民地主義的要素を備えることなく、博覧会の娯楽化傾向と合致するかのようになり、財政再建をにらんだうえでの内外人の集客を目的とする余興的要素を多分に含んだ「伝統日本」展示を積極的に施し、国民体育の振興それ自体のゆらぎを浮き彫りにするものであった。

5. おわりに

明治後期から大正初期にかけて、日本の帝国主義化が進行する中で日本体育会が参画した3度の博覧会は、第五回内国博を端緒として余興的要素、植民地主義的要素を備えた博覧会の娯楽化傾向が顕在化していった中での催しであった。これら博覧会において、日本体育会の使命たる国民体育の振興を参照軸として、各種博覧会での展示活動を通観したところ、日清・日露戦争に勝利した東洋の一等国、列強の一角というその時々国際競争場裡における視界のもと、日本体育会が第五回内国博では「伝統日本」展示、東京勸業博では「近代日本」展示に注力したことが明らかにされた。東京勸業博覧会の特設会場の開設に際して、「近代日本」展示の準備で遅滞が生じ、また、「伝統日本」展示の娯楽化現象の一端がみられたが、この後の東京大正博覧会において、日本体育会が博覧会への参画を重ねる度に悪化していった

財政の再建を企図して、集客を一義的な目的とする娯楽化された「伝統日本」展示に注力したことにより、国民体育の振興のゆらぎが浮き彫りにされた。

「伝統日本」展示と「近代日本」展示、双方への注力が交互にみられた日本体育会の展示活動は、余興的要素を次第に加えていき、東京大正博において博覧会の娯楽化傾向の範疇におさまるかたちとなった。しかしながら、3つの博覧会を通して植民地主義的要素が認められなかった点は注目に値しよう。なぜならば、先行論文の一つにあげた文献の中で吉見は、近代西洋での海外万国博覧会において、欧米人のジャポニズムに訴える展示には、日本が自らをまなざされる客体として呈示していく媚態が確実に存在したが、このような媚態の中で日本は、自らをまなざしていた欧米と同じく、国内博覧会などにおける植民地主義的傾向として、周囲の社会をまなざしはじめていったとする見解を残しているからである⁸⁵⁾。この見解は博覧会史研究が導き出した卓見の一つであるが、日清・日露戦争による日本の勢力拡大と逆説的な日本人と近隣アジア地域の人びととの間に明確な体位・体力差が存在した訳ではなかった。このような中での国民体育の振興という一主体の使命に照準してみた場合、再考の余地があるのではなかろうか。博覧会における特定の参画主体が手掛けた特設会場は、これに関連した事例研究の蓄積により、博覧会史に新たな知見をもたらす可能性を秘めている。ともあれ、本稿では日本体育会と博覧会主催者の局所的なつながりに触れた史料を確認できず、双方の中心人物の人的関係をもとに、各種博覧会で特設会場が開設された経緯を明らかにしきれなかった点を指摘しておかねばならない。

今後の研究では、本稿の検討対象時期である明治期、および、大正期以降、自治体や商業資本などの多様な運営主体により、博覧会の娯楽化が定着していった都市部に注目し、体育の奨励と結びつきたいかなる展示活動が編み出されていったのかを探っていきたい。

注および引用・参考文献

- 1) 日本を代表する体育・スポーツ史研究者の一人である木村は、学校体育と社会体育の領域区分を強く意識することなく、国家富強のために強壯な国民の身体を育成する狙いをもった概念として、国民体育という用語が明治20年代半ばにいち早く日本体育会で登場し、軍事訓練的内容の運動を基調としつつ、遊戯・スポーツ的なものを取り入れ、若干の幅を広げていったことを指摘している（木村吉次：明治期の「国民体育」の概念に関する一考察「中京大学体育研究所紀要」第7号、pp.5-15、1993年）。
- 2) 本稿は、博覧会主催者が設定した教育、衛生等の出品部類にたいする日本体育会の出品・展示ではなく、同会が運営した特設会場での展示活動に照準するものである。
- 3) 「伝統日本」展示、および、「近代日本」展示の表記は、万国博覧会への出品戦略として、日本の伝統品を並べてその独自性をアピールする方法、西洋技術を取り入れたモノを展示して西洋化に励む日本をアピールする方法として両展示を分けけた國の記述を参考にした（國雄行：『博覧会と明治の日本』吉川弘文館、2010年、p.168）。
- 4) 後述する吉見の研究を継承した松田は、第五回内国勸業博覧会の展示活動にみる他者表象の分析を通して、植民地主義を後景とする帝國的な意識や思想が形成される場としての博覧会を詳らかにしている（松田京子：『帝国の視線－博覧会と異文化表象－』吉川弘文館、2003年）。
- 5) 明治26年11月に創刊した「文武叢誌」の後継誌として、明治32年3月より大正3年6月まで発行された「體育」は、日本体育会関係者の書き下ろし、講演録や諸事業の記録等が掲載されており、当該期間における日本体育会の動静を細かに把握できるため、本稿の主要史料とした。
- 6) 明治後期から大正初期にかけてまとめられた雑誌記事、新聞記事等を史料とする本研究では、当時のアジア諸国に関わる差別的表現、今日において使用されていない地名等が記述に含まれている。これらの記述については、当該記事の執筆者の自意識を示すものとして使用することを了承していただきたい。
- 7) 木下秀明：『スポーツの近代日本史』杏林書院、1970年、pp.77-78；水野忠文、他3名：『体育史概説』（第10版）杏林書院、1994年、pp.270-271
- 8) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編：『学校法人日本体育会日本体育大学八十年史』学校法人日本体育会、1973年、pp.295-308、pp.458-470
- 9) 学校法人日本体育会百年史編纂委員会編：『学校法人日本体育会百年史』学校法人日本体育会、1991年、pp.174-184、220-228
- 10) 日本体育会の博覧会での取り組みに照準したものではないが、大櫃は明治10年の第一回内国勸業博覧会から明治23年の第三回内国勸業博覧会における展示品や出品目録、明治10年に設立された教育博物館の年報をもとに、日本の体操用器具の発展状況を詳らかにしている（大櫃敬史：体操用具国産化への道－初期の内国勸業博覧会および教育博物館の出品物をとおして－『北海道大学教育学部紀要』第54号、pp.13-32、1990年）。
- 11) 谷釜了正：『明治期における日本人の身体の国民化の過程に関する研究－日本体育会の事業にみる国民体育の振興に着目して－』日本体育大学大学院体育科学研究科博士論文、2002年、pp.311-320、343-350
- 12) 井上裕太：戦前期におけるスポーツ展覧会の分類と特徴「博物館学雑誌」第40巻第2号、pp.69-88、2015年
- 13) 井上裕太：スポーツの展示における「同時代性」－戦前期に開催された野球に関する展覧会を中心に－、青木豊先生古希記念発起人会編『21世紀の博物館学・考古学』雄山閣、

- 2021年、pp.55-64
- 14) 松田京子：前掲書、pp.9-11；國雄行：『博覧会の時代－明治政府の博覧会政策－』岩田書院、2006年、pp.9-13；伊藤真実子：博覧会研究の動向について－博覧会研究の現在とその意義－「史学雑誌」第117巻第11号、pp.1981-1989、2008年；竹内竜巳：博覧会研究史の整理と動向「國學院大學博物館學紀要」第38号、pp.147-158、2013年
 - 15) 吉見俊哉：『博覧会の政治学』中央公論社、1992年
 - 16) 國：『博覧会の時代－明治政府の博覧会政策－』；『博覧会と明治の日本』
 - 17) 日高藤吉郎：体育会設立ノ趣旨「有文會誌」第14号、pp.48-49、1891年
 - 18) 谷釜：前掲書、p.210
 - 19) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編：前掲書、p.148
 - 20) 興隆期の日本体育会は、軍事面に多大な関心を寄せていたが、その一方で、「たしかに吉村会長の時代には、高島平三郎、川瀬元九郎をはじめ、教育色が強まっている」（同上書、p.337）との指摘がある。日本体育会体操学校の初代校長を務めた吉村寅太郎、文民校長であった吉村を引き継いだ高島平三郎や川瀬元九郎と日本体育史上の著名人が教授陣に名を連ねたように、日本体育会は教育色に彩られた一面も備えていた。
 - 21) 同上書、p.221
 - 22) 『日本體育會事業概略』（東京都公文書館蔵：収録先請求番号、625.B6.02）
 - 23) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編：前掲書、p.37
 - 24) 同上書、p.40
 - 25) 谷釜：前掲書、p.505
 - 26) 東京府からの補助金交付は、明治34年度から3カ年度にわたり年額500円、明治37年度より300円に減額し、大正3年度まで継続した。東京市からの補助金交付は、臨時的な性格を有していた。
 - 27) 学校法人日本体育会百年史編纂委員会編：前掲書、p.225
 - 28) 國：『博覧会の時代－明治政府の博覧会政策－』、p.10
 - 29) 第五回内国勸業博覧会を端緒とした博覧会の娯楽化について、國は「余興の実施とその圧倒的人気は、日本の内国博の構造を転換させる衝撃的なものであった。この内国博から娯楽性が著しく高まり、現代の遊園地のような博覧会の原型がつけられたのである」と今日の博覧会に連なる見解を示している（國：『博覧会と明治の日本』、p.184）。
 - 30) 野口勝一：第五回内國勸業博覧會「風俗畫報臨時増刊 第五回内國勸業博覧會圖會」（上編）、p.1、1903年
 - 31) 第五回内國勸業博覧會場内日本體育會特設體育場開閉始末「體育」第118号、p.43、1903年
 - 32) 第五回内國勸業博覧會日本體育會臨時體育部規則「體育」、同上書、p.46
 - 33) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編：前掲書、p.299
 - 34) 第五回内國勸業博覧會場内日本體育會特設體育場開閉始末、前掲書、pp.47-48
 - 35) 博覽會彙報「大阪朝日新聞」1903年2月10日付2面
 - 36) 日本體育會：『日本之體育』育英舎、1903年、p.1（上編）
 - 37) 博覽會附録「大阪朝日新聞」1903年3月11日付1面
 - 38) 700点から800点に及んだとされる展示物のうち（博覽會彙報「大阪朝日新聞」1903年2月24日付2面）、古来武芸・遊戯に関する器具は、上・下からなる『日本之體育』の上編を埋め尽くすように紹介されている。ここから、日本体育会が当該器具の展示活動にとりわけ注力したことがうかがえよう。
 - 39) 日本體育會：前掲書、p.12（上編）
 - 40) 「伝統日本」展示の例をあげると、蹴鞠「我が國人ノ如ク座居シテ働カスルコト少キモノ

ハ脚部ノ運動ヲ充分ナラシメンコトヲ最モ必要ニシテ、蹴鞠ハ實ニ適切ニ此ノ目的ニ合スレバナリ」(同上書上編、p.59)、竹馬「手足ノ筋肉ノ發育ヲ助クルハ勿論心理的ニハ意思ノ管制力ヲ増加スベク用法ニ由リテハ有益ナルモノナリ」(同上書上編、p.66)とある。また下編では、ベースボール「青年活氣ノ年輩ニハ、軀軀ノ勞役ニ伴ツテ生理上ノ多クノ効益アルト共ニ、勇氣ヲ鼓吹スルモノナレハ、精神上マタ益スルトコロ多シ」(同上書下編、pp.42-43)、フットボール(サッカー・ラグビー)「我国人ノ如ク下肢部ノ短矮ナル人種ニ課サバー層其ノ効ヲ認ムルベキ」(同上書下編：p.58)など、「近代日本」展示にも説明が加えられている。

- 41) 加納久宣：日本体育会の主張「體育」第118号、p.1、1903年
- 42) 寺田勇吉：邦人の體格「體育」、同上書、p.24
- 43) 彙報「體育」第114号、pp.32-34、1903年
- 44) 博覽會附録「大阪朝日新聞」1903年5月10日付2面
- 45) 第五回内國勸業博覽會場内日本體育會特設體育場開閉始末、前掲書、p.46
- 46) 博覽會附録「大阪朝日新聞」1903年4月18日付2面
- 47) 前述した吉見、松田の文献では、近隣アジア地域への差別的な関心が第五回内國博で喚起されたとしているが、その形跡が特設体育場にはなかった。この直接的な理由を導き出す史料を持ち合わせていないが、日本体育会体操学校関係者であった松井次郎兵衛が、日露戦争の開戦前に中国領土に進出した欧米列強を退却させるために、日清韓の連携による体操訓練を通した国力の向上を希望していたとの記述が東アジアの体育科教育史研究に取り組む尚大鵬の論考にある(尚大鵬：明治後期における中国人留学生に対する軍事教育－日本体育会を中心として－「広島東洋史学報」第7号、p.52、2002年)。これに手掛りを求

めるならば、日本体育会に少なからず宿っていた日清韓の三国一致を基調とする東亜保全の思想が、近隣アジア地域に向けられていたと考えられる。ただし、日露戦争後の日本体育会における東亜保全の思想の在り処は定かでない。

- 48) 高木栄吉・清宮秀之助(編)：『東京勸業博覽會実記』重宝新聞社、1907、p.1
- 49) 伊藤真実子：『明治日本と万国博覽會』吉川弘文館、2008年、p.213
- 50) 谷釜：前掲書、p.327
- 51) 戦捷紀念體育館建設の趣旨：「體育」第143号、p.1(前付)、1905年
- 52) 谷釜：前掲書、p.343
- 53) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編：前掲書、p.458
- 54) 富國強兵の基「體育」第145号、p.7、1905年
- 55) 内外彙報「體育」第154号、p.52、1906年
- 56) この点については、日本初の総合雑誌「太陽」の特集記事「戦後經營」が「十年前の戦後經營は、其の規模猶を東洋的なるを免がれざりき。而も未だ十分之れが解決を見る能わずして今日に及べり・・中略・・日露の戦争は、日本帝國として世界一等國の地位に入らしめたり。然れども世界一等國とは、單に武力の優勝を意味するものなりと謂うべからず、即ち國民の生活状態が總て高度の文明に在ることを標示するものなり」(戦後經營「太陽」第12巻第9号、p.1、1906年)とする扉で組まれたことに教示されよう。
- 57) 谷猶三郎：東京博覽會體育館に突き鄙見を述べ「體育」第162号、p.63、1907年
- 58) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編：前掲書、p.458
- 59) むだをせずくたびれぬ觀覽順序「報知新聞」1907年4月7日付1面(博覽會報知新聞)
- 60) 内外彙報「體育」第157号、p.53、1907年
- 61) 谷猶三郎：東京博覽會體育館に突き鄙見を述べ(承前)「體育」第163号、pp.46-47、1907年

- 62) 内外彙報「體育」第160号、p.53、1907年
- 63) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編：前掲書、p.463
- 64) 蹴鞠中止の内容（東京博覽會に於ける）「大阪朝日新聞」1907年6月4日付9面
- 65) 東京博覽會「東京朝日新聞」1907年4月16日付6面
- 66) 東京博覽會「東京朝日新聞」1907年4月5日付6面
- 67) 寒川恒夫編：『図説スポーツ史』朝倉書店、1995年、p.155
- 68) 東アジア文化交流史の研究に取り組む見城悌治は、ロシア人捕虜をめぐる問題を事例として、日露戦争後の日本の西洋文明的価値観への準拠、その憧憬と反発の交錯に着目した論考をまとめている。その内容の一部は、本論の叙述に大きな示唆を与えているので、ここであげておきたい（見城悌治：日本社会の「文明」観・「アジア」観と日露戦争、安田浩・趙景達編『戦争の時代と社会』青木書店、2005年、p.44）。
- 西洋ロシアを倒した日本は、「文明」国集団（「一等国」といい換えてもよい）の末席につく資格を得たが、それゆえに「文明」的なふる舞いをする必要があることを強く自覚していた。しかしながら、それは西洋に対するコンプレックスと「アジア」（東洋）に対する日本の優越意識の醸成と表裏一体のものであったのだ。日露戦争は、そうした意識を日本社会に確実に刻印する役割も演じていったといえよう。（カッコ内記述原著者）
- 69) 吉見は日本の博覽會における植民地主義的要素について「日露戦争のあたりから、これまで欧米の万国博で見たのと同様の植民地主義的な展示方式を、積極的に国内の博覽會に導入していくようになる・・・中略・・・第五回内国博に現れた台湾館は、その後の博覽會でも何度も登場することになる。とりわけ、こうした植民地パビリオンが、日本の博覽會で急激にその数を増すのは、一九一四（大正三）年の東京大正博以降である」（吉見：前掲書、pp.212-213）との拡大傾向を俯瞰的に示している。
- 70) 博覽會ごとの外国人観覧者数に注目すると、第五回内国博は9570人（内、清国840人）、東京勸業博は3323人（内、支那244人）、東京大正博は「ジャパンツーリストビューロー」への西洋人を中心とする来訪者が2440人、日支交通會への中国人来訪者が3084人との記録が残されている（大阪市役所商工課：『第五回内国勸業博覽會報告書』大阪市役所商工課、1904年、pp.145-146；東京府廳：『東京勸業博覽會事務報告（下巻）』東京府廳1909年、pp.445-446；東京府廳：『東京大正博覽會事務報告（下巻）』東京府廳、1916年、pp.665-666）。会場周辺の宿泊者数や博覽會案内所への来訪者数等、各博覽會の集計元は一致しておらず、上記の数は参考値に過ぎないが、東京大正博は東京勸業博の倍近い外国人観覧者を集めたと推し量れよう。
- 71) 比志島義輝：東京大正博覽會體育館上棟式に於ける式辭「體育」第243号、pp.3-4、1914年
- 72) 寺田勇吉：日本體育會の主張「體育」第170号、p.6、1908年
- 73) これに該当する記事は、以下のとおりである。
- 井上八郎：東京市民の體育を論ず「體育」第198号、pp.1-4、1910年；日本體育會事業の狀況「體育」第210号、pp.1-5、1911年；眞行寺春溪：公設體育場増設の議「體育」第211号、pp.1-4、1911年；日本體育會の施設事業「體育」第212号、pp.1-3、1911年；手島儀太郎：ジムネージウムに就いて「體育」第219号、pp.6-8、1912年
- 74) 大日本體育會は甚だ危急なり「東京日日新聞」明治44年4月20日付5面
- 75) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編：前掲書、pp.466-467

- 76) 一記者：東京大正博覽會附屬體育館に遊ぶ
「體育」第245号、pp.58-59、1914年
- 77) 西村義風編：『東京大正博覽會要覽』産業評論社、1914年、p.158
- 78) 持餘しの體育館－博覽會の後始末（六）『読売新聞』大正3年7月28日付7面
- 79) 西村義風編：前掲書、p.159
- 80) 日本體育會事業擴張趣旨書「體育」第213号、pp.1-2、1911年
- 81) 質疑應答「體育」第246号、p.69、1914年
- 82) 日本体育会の東京大正博への参画については、財政再建の期待に加え、その正確は期しがたいが、閑院宮殿下が同博覧会の総裁であったことが後押ししたものと推察される。
- 83) 機関誌「體育」や新聞記事を渉猟した限り、ローラースケートに関わる雑報記事を確認できるが、体育参考館に陳列された室内運動に関する諸器械、医療体育の図並に器具器械の展示内容は把握できなかった。この背景には、時間の経過とともに外来スポーツや欧米産の運動用器具が普及し、「近代日本」展示の報道価値が低下していた実状があったと考えられるが、「近代日本」展示に衆目を集める呼び物が無かったとも捉えられよう。
- 84) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編：前掲書、p.468
- 85) 吉見：前掲書、p.208

(2022年5月28日受付)
(2023年1月21日受理)